

肝炎重症度の目印

免疫細胞の構造で判定

東京医科歯科大

東京医科歯科大学の小川佳宏教授、菅波孝祥特任教授らは肥満などが原因で発症する「非アルコール性脂肪肝炎（NASH）」の重症度を知らずから肝臓が硬くなることなどに関与する免疫細胞の特殊な構造の数から判定する。この構造がある場所から肝臓が硬くなることも分かった。治療法開発などに役立てる。

（電子版）に発表した。肝炎は飲酒が原因で発症する例が多いが、NASHはメタボリック（内臓脂肪）症候群などで肝臓の細胞に脂肪がたまり炎症が起こる。重症になると肝硬変や肝臓がんに進行する。今のところ有効な治療法はない。

患者51人の肝臓組織を詳しく調べた。脂肪をため込み死んだ肝細胞を、免疫細胞が取り囲んだ王冠のような構造を共通して持っていた。この場所から、組織が硬くなる「線維化」と呼ぶ患者特有の状態が始まっていた。今後はNASHが悪化する仕組みなどを解明する。

研究チームはNASH